佐 Z

木徹也君

作 Ш

昭和六十年寮歌

芳香馨、 沈黙の杜に春来告げる し辛夷の花よ

純白き残雪未だ消えやらず

されど恵迪此処に在り 郷 愁 胸に充満つるとも 永き寒冬偲ばるる哉

我故知らず 涙流しぬ 水恋鳥の哀しき聲に

短か されど憧憬恵迪に在り 哀愁胸に充満つるとも めいしゅうむね み 樹々色づきてはや盛夏逝きぬきょぎいろ き夏と認識りはすれども

> 夕細道は幽か続きてゆうほそみち かそ つづ 紅雲流るる黄昏どきに

何望むなく彷徨ひゆける この現身を悲哀しみにけ されど青春恵迪に在り 愁 心胸に充満つるとも

ń

我に向か 寂寥胸に充満つるとも 数多群なす星座の中にあまたむれ 天指す枝柯に樹 氷咲く 雪舞ひ踊る白銀 いて天狼星光る の世よ

されど経営恵迪に在り

弛むことなく唯時は逝き Ŧi.

追憶胸に充満つるともついおくむね 限れる生を燃やし尽さむかぎ 其は人の世の眞理なれども 生きとし生けるものは去りゆく されど恵迪永遠に在れ